

「メニエール氏病・ブドウ膜炎・黄斑変性症・リウマチ性多発筋痛症・アトピー性皮膚炎・ヘルペス性発作性高血圧症」をどのように自分の免疫で治すかを松本理論により、私自身が理解した松本理論のまとめ

徳弘 徳子 76歳

2014年4月9日

(徳弘さんは私よりも頭の良い方で、私の理論を完璧に理解しておられます。医学にはまるで関わりのない素人の方でも、病気の本質をこれほど完全に理解されている人はこの日本には数人しかおられません。しかも徳弘さんを除いては、彼らはほとんどがとびきり優秀な若者です。なぜ76歳の徳弘さんが私の免疫の理論を完全に理解することができたのでしょうか？答えは極めて簡単です。病気を治すことほど簡単なことはないからです。なぜならば病気を治すのは、医者でもなく薬でもなく、人間が生まれもった免疫の遺伝子の働きだけです。この免疫の遺伝子を抑えない限りは、病気は患者さん自身で治すことができるのです。というよりも、患者さん自身の免疫の遺伝子でしか病気は治せないのです。それほど免疫の遺伝子の働きは命を守る目的のために完璧であり、単純明快であり、合目的であり、論理的であり、一点の矛盾をも認めない遺伝子に38億年かかって作りあげられたのです。つまり免疫の遺伝子は一途に命を守るだけの仕事をしており、欲や利害や損得や金儲けには全く関わりがないので間違いを犯すことがないからです。従って筋道を立て論理的にものを考え、かつ素直で正直であれば、誰でも簡単に私の理論は理解できるからです。その意味でも徳弘さんは日本一頭の良い76歳のお方でいらっしゃる上に、日本一素直で正直である方だといえます。この良い頭と真っすぐな心で私の免疫の理論を簡潔にまとめてくださったので、敬意を込めて手記以外にここに掲載しておきます。彼女の書かれたこの論文には間違いは何もないので、余計な私のコメントも必要でないのですが、彼女の理解された松本理論を医学的にさらに深めるために、何ヶ所かに説明を加えておきました。こんな素晴らしい松本理論の総括を書いていたことを心から感謝します。)

異物とは...アトピーは飲食物に運ばれる化学物質と大気汚染物質。膠原病は飲食物に運ばれる化学物質と人体老廃物とウイルスや細菌の断片。人間の免疫は常にタンパク質と結びついた異物を認識する原理原則で敵を認識するので、化学物質もタンパク質と結びつかない限り異物と認識されない。

病気とは...体内に入った異物や住みついているヘルペスウイルスをあらゆる組織に張り巡らされている免疫が認識し戦いによって生じ、症状が悪いのは免疫が敵をやっつけている証拠であり、命を守ってくれる免疫が正常である事を実証しているだけです。遺伝子によって支配される生命は完璧です。

認識された病気は21世紀においては化学物質とヘルペスウイルスだけです。生まれつきの遺伝子病又は後天的遺伝子病である癌は、生命根源である遺伝子の命

令で老いる事により遺伝子の変性（自分自身の代謝産物、化学物質、紫外線、放射線等）で発症するので仕方ありません。感染症はワクチンや抗生物質で治ります。製薬メーカーが作る薬の中で価値あるのは、免疫を助ける薬でワクチン、抗生物質、抗ヘルペス剤だけです。

漢方薬は、先天免疫を上げることによって免疫の働きを高め、痛みがあれば免疫を抑制しないで痛みを楽にして血流を良くして、抗原抗体複合物や組織破壊産物などの炎症産物を血流に吸収させて肝臓や腎臓から吐き出させたり、粘膜から粘液を出させて、目、鼻、皮膚からも排出させます。

農産物（薬用植物草根木皮）は光合成（光、水、二酸化炭素）によって光のエネルギーを栄養物に変えて作られたもので、炭水化物、脂質、タンパク質とビタミン、ミネラルを含む植物は自分を守る免疫成分も作る。よって免疫と栄養（自然治癒力）を戴いているのです。製薬メーカーの工場で作られた医者が出す薬（対処療法をやるとウイルス、細菌、化学物質に対する戦いは一時的になくなるのです）と併用は効力を失います。なぜならば漢方薬で先天免疫を高めて病気を治そうとしているのに、西洋医学の薬で免疫を抑えて病気を作ろうとしているので、全く意味がないのです。

先天免疫（自然免疫）...好中球や大食細胞やNK細胞の様に特異性を持たないで、どんどん細菌やウイルスを食べてしまう食細胞運動、炎症、細胞破壊などの免疫の働きを有する悪い敵をやっつける軍隊の仕事をする細胞たちです。

補体（抗体の作用補完することからの名）も極めて大切な先天免疫の一つです。  
(近いうちに補体の全てについて分かりやすく説明する予定です。乞うご期待。)

後天免疫（獲得免疫）...T細胞やB細胞の様にウイルスや細菌をやっつけるのにたった一種類のウイルスや細菌に対してしか戦えない特別仕立てのテラーメイドの免疫の働きを持っています。

漢方煎剤...先天免疫を上げ、漢方植物のエキスを取り入れ組織成分が多く腸管蠕動が良くなり快便にもなります。

鍼灸...免疫を上げクラススイッチが起こりやすくなり痛みを痒みに変えてくれます。もちろん痛み楽にしてくれます。

漢方浴剤...免疫を上げ、全身の血流が良くなり水分の代謝も盛んになり老廃物の処理、細胞の新陳代謝も良くなります。

ステロイドの悪さ...細菌やウイルスや化学物質と免疫が戦う時に敵と出会った免疫の細胞たちは、これらの敵と出会うとDNAから mRNAに遺伝情報が転写され、さらにmRNAからタンパク質を作ります。このタンパク質が武器であり弾薬であり核兵器なのです。(DNA→RNA→タンパク質 この流れをセントラルドグマ)。私達はこのような敵から身を守るタンパク質があるからこそ生きているといえます。ステロイドは免疫細胞のみならず細胞の中に簡単に入り込み、細胞脂質の中にあるステロイドホルモンレセプターと結びついて核の中に入り込みます。その核の中のDNAに結びついて様々なタンパク質が作られる転写調節因子に影響を与えエピジェネティックな働きを（必要な遺伝子の発現は転写調節因

子によってONにし、不必要な遺伝子はOFF にしておく事。メチル化) 自由自在にONにしたりOFFにしたりして免疫反応を抑制する仕事を開始します。免疫細胞リンパ球を始め、その他好塩基球、好酸球、大食細胞、樹枝状細胞など全て免疫に関わる細胞が減り、免疫の働き、抑制の結果、免疫に必要な TNF- $\alpha$ やIL-1や IL-2やインターフェロンIFN- $\gamma$ などあらゆるサイトカイン(生物活性因子、タンパク質)の生産や働きを全てステロイドは抑制します。細菌を食べる末梢血の好中球だけは寿命が短く(4~5日が寿命です)ステロイドの影響を受けにくく、逆にステロイドの影響を補償するために増えます。この好中球はあらゆる下等動物も有し、先天免疫に属する細胞であり高等脊椎動物だけが有しているステロイドホルモンには影響を受けにくいのです。ステロイドを使っている間は免疫反応を抑制する為に、死ぬまであらゆる神経細胞に隠れているヘルペスウイルスはどんどん増殖します。

(人間の免疫細胞は、敵を認識した時にその敵をやっつけるための免疫のタンパク質を作るために、遺伝子の発現をONにしてセントラルドグマにそって、その敵をやっつけるためのタンパク質を作り出し始めます。これを「免疫の遺伝子のスイッチがONになった」とか、「遺伝子が発現した」といいます。そして病気の症状が出ます。このときにステロイドを投与すると、一挙に全ての症状が消え去ります。皆さん、ステロイドは何をしたと思いますか？ステロイドは免疫の細胞の核の中にある遺伝子の中に入り込んで、免疫の遺伝子のスイッチのONをOFFにしてしまうのです。つまり遺伝子の働きを一時的に消滅させてしまうのです。この働き以外に本当はもっと大事な働きがあるのです。それについて少し詳しく書いておきましょう。

病気が出たときにステロイドを投与すると、一挙に戦いが止められて症状が消えてしまい、病気が治ったように見えますね。実はステロイドを投与して症状が消えるのは、単に戦いの開始を命令する転写因子がOFFになっただけではないのです。これまで私はステロイドの効果を、専ら免疫の遺伝子のON/OFFについての説明に力点をおいていたきらいがあります。なぜならば、患者さんは全て免疫のスイッチがONにされたものをステロイドによって一時的にOFFにされることを繰り返してきただけで、病気そのものが治らないということに気がついた人たちの症状についてのみ説明してきたためです。ところが近頃症状が取れても「死ぬまでステロイドを使いなさい」と言われる患者さんが多くなってきたので、ステロイドの本当の意味についても詳しく説明する必要に迫られました。ここでステロイドが単に転写因子をONをOFFに変えるだけではない、もっと本質的なステロイドの機能について大切な話をしあげたいと思います。

これからの話は、病気が起こっていないときにステロイドを投与することによって何が起きているかの詳しい説明となります。まず具体的な話から始めまし

よう。例えば気管支ぜんそくの人が医者にぜんそく発作を予防するために「朝晩ステロイド入りのスプレーを用いて、口から1日2回死ぬまで噴霧器で投与しなさい」と言われ、疑問に感じて当院に受診される人がたくさんいます。つまり症状が起こっていないのに、なぜ投与させるのでしょうか？その意味を分かりやすく述べてあげましょう。他にも具体的な例としては、ステロイドを少し塗るだけでアトピーの症状がなくなってしまったにもかかわらず、入院させ続けて1ヶ月間にわたってステロイドホルモンを毎日毎日塗り続けるアトピー治療が多くなっています。症状がないので、免疫と異物との戦いは既に終わってしまうにもかかわらず、間違った治療が盛んに全国の病院で行われています。その意味についても述べてあげましょう。かなり難しくなりますがついてきてください。

まずはじめに、免疫細胞が異物を認識してそれをやっつけるために、どのようにして熱を出したり痛みを出したり炎症を起こしたりするかのメカニズムを述べる必要があります。これを理解しておかないとステロイドを投与したときになぜ症状が消えてしまうのかを理解することは不可能であるからです。

分かりやすい話から始めましょう。皆さんはまず病気であるかどうかの指標として、痛みや熱、さらに腫れや発赤などをまず考えませんか？まさにこのような症状に直接関わっているのがプロスタグランジンであります。特に痛い時に痛み止めを飲むのは何のためでしょう？このプロスタグランジンの働きを抑えるためであるのです。このような薬を非ステロイド系抗炎症薬といわれることをご存知でしょう。普通の医者は急性の上気道炎が起こった時の発熱や痛みや炎症を抑える薬だと言って出す薬は、全てこのプロスタグランジンを生合成するのを抑えているだけなのです。ときにはリウマチなどにおける痛み止めや熱がある時にも同じ薬が使われるのです。それではこのような病気の時に炎症症状を起こすプロスタグランジンはどのようにして作られるのでしょうか？まずそれを理解しましょう。

全ての細胞の膜は食べ物から取り込まれたアラキドン酸という不飽和脂肪酸である脂質が細胞膜に蓄えられます。このアラキドン酸を含んでいる細胞膜が、体外から入ってくる異物によって物理的・化学的な刺激を受けたり、細胞膜が損傷したりすると、この細胞膜を作っている別のリン脂質であるホスホリパーゼA<sub>2</sub>が活性化し、細胞膜にあるアラキドン酸が細胞質内に遊離します。細胞質内に遊離したアラキドン酸は、細胞内のシクロオキシゲナーゼ（COX）という酵素によって代謝されて、プロスタグランジンG<sub>2</sub>（PGG<sub>2</sub>）がまず作られます。このPGG<sub>2</sub>から痛みを強める物質であるプロスタグランジンE<sub>2</sub>（PGE<sub>2</sub>）やプロスタグランジンI<sub>2</sub>（PGI<sub>2</sub>）などの多種類のプロスタグランジン（PG）が合成されます。このPGE<sub>2</sub>とPGI<sub>2</sub>の2つのプロスタグランジンは、血管拡張作用を持つと同時に、ブラジキニンという痛みをもたらす化学物質の働きを増強するので

す。つまりPG自身が痛みを持つものではないということを知ってください。

PGI<sub>2</sub>は血管を拡張するのみならず、血小板凝集抑制作用と血管の平滑筋弛緩作用を持っています。さらにPGから血小板凝集を引き起こすトロンボキサンA<sub>2</sub> (TXA<sub>2</sub>)も作られるのです。このように互いに相反する作用を持つPGI<sub>2</sub>とTXA<sub>2</sub>が作られるのは、実に興味深いことではありますが、なぜなのかはまだ解明されていません。

プロスタグランディンには発熱を起こす作用もあります。アラキドン酸から作られたプロスタグランディンは視床下部にある体温調節中枢に働いて体温を上昇させる仕事もしているのです。従ってプロスタグランディンの産生を抑える薬は、痛みを止めると同時に解熱作用もあるのです。従って解熱剤と鎮痛薬は同じ薬となるのです。ところが、アスピリン（バファリン）やロキソニンなど、あらゆる非ステロイド性の抗炎症薬は、直接プロスタグランディンの働きを抑えているのではなくて、シクロオキシゲナーゼ（COX）という酵素の働きを抑えるので、プロスタグランディンが合成されないだけなのです。

もうひとつアラキドン酸から作られるロイコトリエンの話をする必要があります。皆さん、小野製薬が出しているオノンという気管支喘息の薬を知っていますか？このオノンはどうして喘息の発作を止めることができるのでしょうか？上に述べたように、プロスタグランディンは細胞膜にあるアラキドン酸にホスホリパーゼA<sub>2</sub>という酵素が働くと最後に作られると言いました。このアラキドン酸にまずホスホリパーゼA<sub>2</sub>が働いた後に、シクロオキシゲナーゼ（COX）ではなく、別の酵素であるリポキシゲナーゼ(LOX)が働くとロイコトリエン（LT）というタンパク質ができます。このロイコトリエン（LT）にも様々な種類があります。LTA<sub>4</sub>、LTC<sub>4</sub>、LTD<sub>4</sub>、LTE<sub>4</sub>などであります。このロイコトリエン（LT）は白血球であるリンパ球のみならず、大食細胞や肥満細胞や単球などからも作られるのです。オノンは気管支粘膜のロイコトリエン受容体に、ロイコトリエンがつく前に先に結合してしまいLTの働きを阻害します。このロイコトリエンが気管支粘膜にひっつくと、強力な血管収縮作用と強力な気管支平滑筋の収縮作用を持っているので、喘息発作が悪化するのです。この気管支平滑筋の収縮作用を抑える薬がオノンであり、喘息発作が楽になるのです。私が医学生時代の頃には、このロイコトリエンはSRSと呼ばれていたことを覚えています。後にこのSRSがLTであることが判明したのです。

注意しておきますが、プロスタグランディンにしろロイコトリエンにしろ、同じ仲間が何種類もあることを知っておいて下さい。これらのひとつひとつの働きを全て勉強するのも大変難しい仕事になります。いずれにしろアラキドン酸から作られる経路は2種類あります。ひとつがプロスタグランジン系であり、もう

ひとつがロイコトリエン系であります。

さあ、ひとまずどのようにして痛みや発熱や炎症が生じるかについて説明し終わったので、ここで最強の抗炎症剤といわれているステロイドホルモンが、どのようにして熱を下げたり痛みをとったり、様々な炎症症状を抑えたりすることができるかについて深く説明する段階にきました。

まず体内にステロイドを医者が投与します。ステロイドは脂質ですから、簡単に白血球や大食細胞の脂質できている細胞膜を貫通し、細胞質に入り込みます。するとこの細胞質にあるステロイドと結びつく特異な受容体と結合すると、さらに核の中に入り込むことができます。もう少し詳しく書きましょう。細胞質にはステロイドが結びつくレセプターが、既にヒートショックタンパク90 (Hsp90) という名前のタンパク質と結びついて待っています。ところが、ステロイドホルモンが細胞外から細胞膜を通過して細胞質に入ってくると、このHsp90が結びついたステロイドレセプターの複合体のステロイドレセプターにステロイドが結びつきます。すると新たにできたこのステロイドホルモンとステロイドレセプターの複合体が核の中に入っていくことができるのです。核に入り込んだこの複合体は、核の染色体にある転写調節領域のプロモーター領域に結合します。例のごとくセントラルドグマによって、その部位のDNAの遺伝子をONにさせます。するとRNAポリメラーゼが働き、その部位の遺伝子情報を持ったmRNA(メッセンジャーRNA)が作られ、さらにこの情報が翻訳されてリポコルチンというタンパク質が合成されます。

リポコルチンという医学専門用語を初めて目にされた人が多いと思いますが、しっかり覚えておいてください。このリポコルチンこそがステロイドが作り出す最も重要なタンパク質であるからです。このリポコルチンが、全ての免疫の遺伝子のONをOFFにしてしまうのです。先程述べたホスホリパーゼA<sub>2</sub>やリポキシゲナーゼ(LOX)という酵素を作らせなくするのも、このリポコルチンであります。この2つの酵素の働きがなくなると、プロスタグランディンもロイコトリエンも作れなくなってしまうので、見かけの熱や痛みや炎症がなくなってしまうのです。

それでは敵が人体に入ってきた時に、それを処理するためにプロスタグランディンやロイコトリエンを作る遺伝子がONになってどんどん炎症が起こっているのに、なぜステロイドを入れることによってOFFになってしまうのでしょうか？つまり皆さんご存知のように、私は何回も何回も医者がステロイドを投与すると、炎症の遺伝子のONがOFFになってしまい、免疫の働きがなくなり病気を治せなくなると言い続けてきましたが、本当はその表現は一部正しくないのです。正しくは、ステロイドは直接にプロスタグランディンやロイコトリエンを作る遺伝子のONやOFFに関わっているわけではなく、本当は新たにステロイドの命令で

リポコルチンを作ることによってシクロオキシゲナーゼ(COX)やリポキシゲナーゼ(LOX)の酵素タンパクを作る遺伝子の働きを間接的にOFFにした、と言うべきなのです。つまりCOXやLOXの遺伝子をONにするためには、酵素タンパクであるホスホリパーゼA<sub>2</sub>という酵素タンパクが絶対に必要なのです。このホスホリパーゼA<sub>2</sub>を作らせる遺伝子をONにならないようにリポコルチンがしてしまったために、自然とCOXやLOXの酵素タンパクを作る遺伝子がOFFになってしまったのです。遺伝子学や免疫学は面白いでしょう。最高ですね！だって今私が書いていることを世界中のどんな医学者も考えたことがないことであることを知っておいてくださいね！ワッハッハ！

ついでにステロイドをやめた時の離脱症状、つまりリバウンド症状がなぜ出るのかを説明しましょう。以上は、ステロイドがプロスタグランディンやロイコトリエンを作らなくさせるメカニズムを書き記しました。ところがステロイドホルモンは何もリポコルチンを作らせるDNAの転写調節領域のプロモーターにひつつくだけではないのです。ステロイドホルモンはリポコルチン以外の多くの遺伝子の発現を抑制することができるのです。そして様々な抗炎症作用を示すことができるのです。大きく分けて3つの抗炎症作用を示すことができます。

ひとつは、今述べたプロスタグランディン以外に、様々な生理活性物質やサイトカインや一酸化窒素のような炎症を起こすメディエーター（炎症の仲介物質）の産生を完全に抑えることができます。皆さんは今まで何回も何回もサイトカインを耳にされてきたでしょうが、一酸化窒素が炎症に関わっていることを初めて知ったでしょう。一酸化窒素は血管弛緩作用やマクロファージの活性化や抗菌作用など、様々な炎症に関わっているのです。サイトカインというのは、免疫や造血や炎症反応の制御に関わっている細胞間の情報伝達を司る微量なタンパク質であるのみならず、内分泌系や神経系にも極めて重要な機能も果たしています。サイトカインのなかには、インターロイキン(IL)、主要因子 $\alpha$ (TNF- $\alpha$ )、血小板活性化因子(PAF)などが炎症に関わりがあります。インターロイキンは白血球によって分泌され、白血球どうしのコミュニケーションを行う生理活性物質といわれるものです。例を挙げればIL-1、IL-2、IL3、IL-4…など無数にあります。TNF- $\alpha$ はマクロファージによって産生され、主要細胞を壊死させるタンパク質です。PAFは好塩基球や血管内皮細胞や他の様々な炎症細胞から放出され、血小板の活性化を亢進させ、炎症による出血を止めたりすることができるのです。

2つめは、免疫細胞が炎症巣に移動するには、細胞どうしがひつつき合う必要があるのですが、そのために必要な接着分子の発現を抑えます。このような接着分子がなくなると、血管から白血球が炎症巣から出ることができなくなったり、様々な免疫細胞がリンパ節に移動したりすることができなくなり、従って免疫と

異物との戦いができなくなります。様々な接着分子があり、インテグリンファミリー、セレクトインファミリー、免疫グロブリンスーパーファミリー、シアロムチンファミリー、カドヘリンスーパーファミリーなどに分類されます。

3つめは、白血球やリンパ球のアポトーシスを促進します。ステロイドによってリンパ球の幹細胞などは遺伝子を変えられると、癌になったり異常な働きを起こすことがあり、それを避けるために自ら自殺するのです。

以上は、免疫系に対する様々な影響を書き記したのでありますが、ステロイドは60兆個の細胞の細胞膜から簡単に細胞質に入り、かつ核に入って人間が生き続けるために必要な様々な転写因子と結びつくことによって、正常な人間の遺伝子の発現を異常にONにしたりOFFにしたりして、訳の分からない病気を作ってしまうのです。この研究もどんどん行われるべきであります。いや、学者の中にはステロイドの副作用を学問として研究している人もいるのですが、その研究成果は悪い話ばかりであるので絶対に表には出てこないのです。なぜならば人間が生き続けるためにはステロイドホルモンは絶対に必要なホルモンであります。多すぎても少なすぎても問題を起こします。だからこそ副腎皮質で作るステロイドホルモンの量は脳の視床下部と下垂体で完全にコントロールされているのです。悲しい話です。

たまたまステロイドホルモンは以上に述べてきたように、病気の症状を一挙に良くしてしまうので、患者に摂っては快樂をもたらすことができるので70年以上もの間医療で使われ続けていますが、元の病気を治すことはできないどころか新たなる遺伝子病を作り続けるのです。麻薬と同じですから、ひとたび使うとリバウンドが出るのでやめることができないのです。たまたま東洋では漢方薬や鍼灸を中国人が発明してくれたので、ステロイドを中国医学の手助けでなんとかリバウンドを乗り越えて完全にやめることができます。ところが欧米においては中国医学の伝統がないので、ひとたびステロイドを使うと絶対にやめられないので、使えば使うほど病気が作られるので欧米の製薬メーカーは大もうけしています。かの悪名高きノバルティスなどは毎年6兆円近くも稼いでいます。残念なことです。病気を治すのは患者の免疫であるにもかかわらず、世界中の医学者は誰も口にしません。残念なことです。日本の武田製薬は売り上げは1兆5000億円程度であります。中国医学がなければもっと稼ぐことができるでしょうに。アッハッハ！)

免疫遺伝子の仕事は、殺すか、封じ込めるか、排除するか、共存するか、四ツの方法で処理します。(人間は生き続けるためには2種類の敵を処理する必要があります。ひとつは言うまでもなく人体に侵入してくる異物です。ふたつめが自



分の敵となる他の人間であります。毎日毎日新聞を読んでいけば分かるように、人間の敵は人間であります。既に何百回も述べていますように、人間の体に侵入する異物は化学物質とヘルペスだけであり、命が奪われることはありませんが、よこしまな人間が自分の欲を叶えるために、他人に対する犯罪が繰り返し繰り返し行われ、尊い命が奪われています。このような人間の敵である犯罪者を処理する方法も、結局は人体に侵入する異物を処理する方法と同じく、敵なる人間を殺すか、封じ込めるか、排除するか、共存するかの4つの方法しかないことは全く同じであることに気がつかれるでしょう。人間が生き続けるためには、このように見えない病気の原因と戦うときも、見える悪しき人間と戦うときも、勝利の方法は同じであることに、大いなる興味を覚えますか？しかも医学の進歩により病気で死ぬことはなくなったにもかかわらず、人間の敵は永遠に人を殺し続けることに恐怖を感じませんか？つまり怖いのは病気ではなく、自分と同じ人間であることに深い悲しみを感じませんか？さらにもっと怖いことは、治療と称して免疫の遺伝子を抑え続けて新たに病気を作り続けている医薬業界に空恐ろしくなりませんか？）製薬メーカーが作るステロイドを始め免疫抑制剤は、病気をつくり（医原病）、ほとんど治らない病気は原因不明とされます。三十八億年と言う悠久の時を経て環境条件等に適応する自然淘汰されて出来た人類の遺伝子は必要だから反応するだけで、自己免疫疾患や過敏反応ではないのです。遺伝子の大きな目的は恒常性を維持し急激に突然に遺伝子が変われば元に戻そうとする修復遺伝子が全ての生命に備わっていて、細胞が癌化する時も修復遺伝子がいつも働いているのです。この神の働きを理解し感謝する事だけが人間に許された行為なのです。

病気を治すのは...唯一原因療法だけであり、自分の免疫の遺伝子だけで薬は免疫の遺伝子が作るタンパク質です。

リバウンドとリバウンドの度合...リバウンド(医原病)は免疫の逆戻り現象(臨床的)であって、これによって膠原病もアレルギーも治します。免疫が抑えられていたものが抑制をはがされて免疫が敵である人体に侵入した異物との戦いが激しくなったと言うことで免疫の遺伝子の働きを取り戻す尊い戦いなのです。どんなリバウンド症状が出てもそれはあくまで生命力の源泉であり遺伝子の発現であるのです。リバウンドの強さはどれだけ自分の心でステロイドを出し続けて、又はどれだけ西洋薬を用いて免疫遺伝子を変えて炎症の蛋白をどれだけ作らない様にさせて来たかの量と使用期間によって決まります。

免疫を上げるとは...先天免疫に関わる免疫の働きが上昇する事です。敵が入って来て初めて異物を認識した時に、免疫遺伝子の発現をONにして免疫を上げるサイトカインを作り出し(炎症を起こすサイトカイン)開始され、かつその信号を細胞の核に伝え、それにより免疫細胞がどんどん増えて異物を排除しようとする戦いが始まるのです。

免疫を抑えるとは...免疫の遺伝子の発現のスイッチをOFFにすることです。遺伝子は一時的に仕事(遺伝子によって作られた免疫タンパク質の働き)が出来な

くなり免疫の働きがなくなりますが、必ずONになった状態を覚えているので(記憶システム)、薬が切れるかストレスが取れるかすると、OFFになっていたスイッチをONにし遺伝子が修復され再び同じ仕事をやり始め(免疫のタンパクが作られ使用される)激しいリバウンドを起こします。(この仕組みの遺伝学的免疫学的説明は上に既に書き記しました。)

化学物質とは...IgGで戦うと膠原病になります。(痛み)免疫を落とした為殺しの世界。IgEで戦うとアレルギーになります。(痒み)排除の世界。体の炎症組織から異物を食べた樹枝状細胞を出来るだけ早くたくさん体中の数千箇所にあるリンパ節に到達させ、そこで異物を認識させるTリンパ球に認識させ、敵を処理する様々なサイトカインと言うタンパク質が作られ、Bリンパ球にIgGを作らせ、さらにBリンパ球はIgGからIgEに抗体を作り変えさせて抗体のクラススイッチを起こさせるのです。(抗体のクラススイッチというのは人間の免疫の遺伝子が敵の種類によって武器を変えることといえます。)IgEを血流に乗せて炎症組織に運ばせそこで痒みを生じさせるのです。最後はレギュラトリT細胞(この細胞がIL-10、TGF- $\beta$ 免疫を抑制するサイトカインを作ります)によって、自然後天的免疫寛容が起こり汚染環境との戦いに負けてIgE抗体が作られなくなり、化学物質と共存が可能となります。抗体は蛋白で出来ていて抗体蛋白とか抗体グロブリンとか言われています。始めはIgM抗体、後に三種類IgG,IgA,IgE、B細胞に結びつくサイトカインによって変化。抗体はB細胞の遺伝子の命令によって作られます。IL-12,IL-2,TNF- $\alpha$ などのサイトカインはIgGをつくるために必要なタンパク質です。IgGが皮下や粘膜で常駐している肥満細胞と結びつくと、この肥満細胞からIL-4が作られ、このIL-4がBリンパ球に結びつくと、Bリンパ球のAID遺伝子は再びONにされて、殺しの世界から排除の世界へチェンジします。IgGからIgEにクラススイッチします。

抗体は五種類、IgM,IgG,IgE,IgA,IgDでY型をしています。敵をつかまえる両手は何億種類もあり、しっぽは五種類で、しっぽの種類によってIgGとかIgEとかに区別されるのです。IgGは殺し屋の細胞。好中球や大食細胞やNK細胞としっぽで結びつくと抗体が両手で捕まえている敵を食べ殺します。(ナチュラルキラー細胞(NK細胞)は、いわばキラーT細胞とヘルパーT細胞の“あいのこ”のような存在です。NK細胞は敵を食べて殺すというよりも、むしろキラーT細胞と同じく、細菌やウイルスが入り込んだ自分の細胞もろとも、化学物質で殺すと言った方が正確です。言うまでもなくNK細胞も生まれはリンパ球と同じ後天免疫細胞のひとつです。)IgEは排除の細胞。肥満細胞、好塩基球、好酸球と結びつくとヒスタミンを出して痒みを感じさせ粘液を出し両手で捕えている敵を皮膚や目、鼻から排除します。両手を変えずにしっぽだけを変える事を抗体のクラススイッチと言います。

膠原病(結合組織病)とは...人体に取り込まれた異物(化学物質)が血管から漏れ出て結合組織に蓄積され、化学物質がハプテン(付着体)になりタンパク質で出来ている結合組織の膠原線維などのタンパクと結びつき、(この膠原線維の

タンパクをキャリアタンパク) これらのキャリアタンパクとハプテンとの複合体を認識した免疫が排除しようとする戦いに見られる症状(炎症)です。免疫が戦っている異物はアレルギーも膠原病も同じです。アレルギー抗体であるIgEを作る為には必ずIgGを作らなければならないのです。何故なら免疫は死んだ異物である蛋白と生きて増殖する異物であるタンパクと区別が始めは出来ないのです。IgGで殺そうとしても、殺しきれないことを学んだ後に排除しにかかるのです。抗体を作るBリンパ球はまずIgGを作ってから抗体クラススイッチを行って初めてIgEを作りますが医者が出す薬(ステロイドを始め免疫抑制剤)やストレスの為、うつにならない様に人体はアドレナリン(副腎髄質ホルモン)やステロイドホルモン(副腎皮質ホルモン)を出し続ける(ストレスと戦うためにエネルギーとして肉体、神経に与える)ことによって、抗体のクラススイッチが妨害されて出来なくなる現象を逆クラススイッチと言います。ストレスが強ければ強いほど逆クラススイッチがいつまでも続き膠原病を発症します。IgGが大量に作られるためにアレルギーではなく膠原病になります。女性ホルモンによって発症する膠原病は女性に多いのです。というのは女性ホルモンのひとつである黄体ホルモンからコルチコステロンというステロイドホルモンが作られるためにクラススイッチがしにくいからです。一方、心のストレスによって生まれる膠原病は男性に多いのです。というのは、男は常に家族を食べさせていくために外で7人の敵と戦い続けねばならないからです。

ヘルペスウイルス(慢性感染症)は、ヘルペスウイルスは人体に入って始めて発症し遺伝子しか持たないので自分のDNAを人間の神経細胞の核に入れて人間のDNAをのっとならないとウイルスは増殖出来ません。人間の免疫や抗ウイルス剤で殺し切ることは出来ないのです。ヘルペスウイルスは免疫が強くなればなるほど神経奥深く退却しひっそりあらゆる神経節(外套細胞と言われる細胞が何重にも囲まれている)に身を潜めて人間の免疫から回避できる最高のテクニックを進化させて狡猾に立ち回り人間が死ぬ迄人体に住み着きます。(外套細胞とは、別名、衛星細胞とかサテライト細胞といわれます。末梢神経系には神経細胞体がたくさん集まっているところがあります。これを神経節と言います。2種類の神経節があり、知覚神経の細胞体が集まっている知覚神経節と、自律神経の細胞体が集まっている自律神経節であります。これらの神経節は、皮膚に包まれており、さらにその皮膚の中に複数個の外套細胞に取り囲まれた多数の神経細胞体が集団を作っているのです。この外套細胞は、神経軸索を包んでいるシュワン細胞とは別の細胞であることを知ってください。この外套細胞は、別名、神経節膠細胞やグリア細胞ともいいます。グリア細胞には3種類あります。星状膠細胞、乏突起膠細胞、小膠細胞であります。とりわけ、小膠細胞は神経節にいるマクロファージの仕事をしています。神経の免疫担当細胞ともいわれることがあります。この衛星細胞の数個~十数個がひとつの神経細胞体に取り巻いています。このように神経節は頑丈にいろいろな膜や細胞に取り囲まれているので、いったんヘルペスウイルスが神経細胞に入り込むと、外から攻撃することができなくなってしま

うのです。ご存知のように、神経細胞は神経樹状突起と神経細胞体と神経軸索の3つの部分から成り立っていますが、一番大切な神経細胞体を敵から攻め込まれないように、皮膜と外套細胞という城壁で囲まれていることが、逆にいったん入り込んだヘルペスウイルスをやっつけることができなくなってしまったのです。ヘルペスウイルスはずる賢いので、神経細胞という城に城壁から侵入するのではなくて、ミエリン鞘の無い神経軸索の末端にある無随神経部分という裏口から入り込んで、天守閣である神経細胞体までこっそりと盗人のように侵入して、免疫から見えないうちに隠れてしまうのです。ヘルペスウイルスがなんと狡猾なウイルスであるかがお分かりになるでしょう。だからこそ、ひとたび人体に侵入し、神経細胞に住みつくと、その人が死ぬまで住み続け、しかも子供や孫に順番に感染し、住み替え続け、永遠に人類を悩ませ続ける永遠性疾患の原因となるのです。まさに衛生観念が発達し、衛生行政も完璧である先進国における病気は、100%ヘルペスウイルス感染症であるにもかかわらず、現在の全世界の医学界はこのヘルペスウイルスこそが最大の病気の原因であることを認めないどころか、その症状を軽減できる抗ヘルペス剤の投与さえも健康保険で使うことを許さないのです。怒りを感じませんか？[現在認められているアシクロビルの2000倍もの強力な抗ヘルペス剤であったソリブジン](#)を亡きものにしたのも医薬業界であるいきさつについては[ここを読んでください](#)。悲しいことです。幸いなことに、ヘルペスの戦いにおいて死ぬことは絶対にはないのですが、あらゆる神経症状を生み出すのはヘルペスの戦いであるということを考えると、現代に必要な薬は抗ヘルペス剤だけだと極論してもよいぐらいなのです。本当の人間の敵はヘルペスウイルスというよりもむしろ、最も尊い仕事についているといわれる医薬業界にとぐるを巻いている医学者や薬学者であるのです。この汚い真実を知れば知るほど、人間の存在そのものに対して背筋が寒くなるほどゾッとしまいませんか？悲しいことです。金の前には他人の苦しみも真実も学問も何の価値も持たなくなってしまうのです。悲しいですねー、悲しいですねー。)ステロイドを始め免疫抑制剤を長期に投与されたり、ストレスの強い生活に耐える為にステロイドホルモンを自分で大量に出して免疫を低下させると、神経線維、神経細胞、皮膚の上皮細胞等に増殖するばかりです。創傷、細菌感染、血管から皮膚の組織からリンパ液が流出して全身むくみ脱水症状、栄養不良状態が出現。免疫が復活してヘルペスウイルスと感覚神経で戦う時、蝸牛神経や前庭神経で神経炎が生じ、耳鳴り、難聴、めまい(メニエール氏病)等様々な症状が出るのです。ストレスが最高潮である時、又はステロイドを大量投与の時は免疫抑制も最高潮で免疫とヘルペスの戦いである症状は出ないのです。(耳鳴りもめまいも)休息はストレスを解放してステロイドの生産は極端に減り免疫の働きが活発になります。免疫反応と言うのはレスポンス(反応)が迅速です。

全ての生命の遺伝子は四つの塩基から成立しています。チミン、グアニン、シトシン、アデニン、またはウラシルでチミンに五炭糖がついたものをチミジン、グアニンに五炭糖がついたものをグアニンヌクレオシドと言います。完璧なヘル

ヘルペスウイルスのDNAを作る為にはこれにリン酸が付きヌクレオチドと言いリン酸をつける酵素をキナーゼと言います。ヘルペスウイルスもDNAそのものですから殺す薬を作ることは出来ません。ヘルペスウイルスは増殖する為には、チミンに五炭糖と結びついたチミジンとグアニンに五炭糖がついたグアニンヌクレオチドが必要です。薬として似たものであるアナログを入れてあげると、つまり抗ヘルペス剤を投与すれば本物と間違っ取り込み偽物を取り込むので増殖出来ません。ヘルペスウイルスは自分のDNAを増す為には、mRNAに転写しなければなりません。この時RNA核酸合成する為にはRNAポリメラーゼと言う酵素が必要でこの酵素に抗ウイルス剤のベルクスロンが入り込んでこの酵素をつくらせなくしてしまうのです。アナログ薬、抗ヘルペス剤のベルクスロンを長期に大量に服用し増殖を防ぎ、一方ADCC（抗体依存性細胞障害）によってナチュラルキラー細胞はヘルペスウイルスが潜んでいる細胞をアポトーシス（細胞自殺）させます。ナチュラルキラー細胞は（NK細胞）後天免疫の免疫細胞である樹状細胞からウイルスの断片提示される必要もなく認識する必要もないのでキラーT細胞（CTL）より早くウイルスを殺すことが出来ます。その理由は免疫の発生の胎生期に免疫細胞、他の全ての成分の細胞に同じタンパク質を持たせ、自己の細胞と自己の免疫細胞はその人独自の目印を持っている自己自身の細胞を攻撃しないのです。この自己だけが持っている独自のタンパク質を作る遺伝子をMHC-I（主要組織抗体-I）と言います。一方、キラーT細胞（CTL）は敵を樹状細胞に提示される必要があり且つ認識しなければならないからです。このときに樹状細胞はMHC-II（主要組織抗体-II）に抗原をのせる必要があるのです。